
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「わざ」の人類学的研究—技術・身体・環境（「もの」の人類学的研究（3））2018年度第2回（通算第4回）研究会

日時：2019年1月11日（金）1月12日（土）

場所：AA研306号室

内容：今回は2018年度の第2回研究回であるが発表人数の関係で1月11日（金）と1月12日（土）の2日間に渡って実施された。まず1月11日（金）には冒頭で代表者の床呂郁哉（AA研）による今後の研究会の進め方などに関する簡単な説明があった。これに続き以下のように計3編の報告が実施された（下記の11日の「報告1」から「報告3」を参照）。

また翌日12日（土）にも同じく3編の報告が実施された（下記、1月12日「報告1」から「報告3」）。各報告の後は恒例のように参加者全員により個別の発表内容に関する質疑応答はもちろんのこと、今後の「わざ」に関する人類学的研究の方策にも関わる内容にも触れる総合的な議論が実施された。以下は各個別報告の内容の概要について紹介する。

1月11日（金）

報告1

「異種間のあいだの『わざ』」奥野克巳（立教大学/AA研共同研究員）

模倣は生物にとっての普遍であり、人間において「模倣の能力」という高次の機能にまで高められたと説くW.ベンヤミンを出発点として、本発表では、異種間の模倣について、とりわけ、「人間による他の生物種の模倣」と「生物種と他の生物種という異種同士の模倣」を比較しながら、考察検討した。人間による他の生物種の模倣に関して、まずはマレーシア・サラワク州のプナンとロシア・シベリアのユカギールに見られる似通った狩猟実践を取り上げた。R.ウィラースレフの詳細な考察分析によれば、ユカギールの狩猟実践は、「模倣的共感」と呼ばれる狩猟実践以前の儀礼的な段階と、狩りの対象であるエルクを模倣する狩猟実践の段階という二段階から構成される。第二段階の狩猟実践の現場で狩猟者は、他種を模倣して他種になりきってしまうわけではなく、最後の瞬間に人間へと戻って、他種を獲物として狩る。第二段階の模倣を含む狩猟実践は、上妻世海のいう、「制作的空間」にあたる。模倣的共感をつうじて相手を誘惑しつつ、狩猟がおこなわれる制作的空間で、M.ブーバーのいう〈我と汝〉の関係性の中に入った狩猟者は、その関係性を持続しつつ、最後の最後にエルクを「汝」ではなく「それ」とみなし、〈我とそれ〉関係へと入って、狩りの目的を達成する。そもそも、人間による他種の模倣を可能にする社会とは、人間だけによって構成される「共同体」ではなく、人間と異種がともに作り上げている「共異体」なのである。異種体と呼ぶことができる多自然主義的な社会では、E.ユーンが『森は考える』で取り上げたエクアドル東部のルナのように、異種間の〈我と汝〉と〈我とそれ〉の関係性が複雑に織りなされている。こうした人間による他種の模倣をめぐる探究を経て、本発表では最後に、日高敏隆の観察データに基づいて、ガヤカ ミキリムシ、チョウなどの種間による模倣を取り上げた。日高を踏まえ

ば、擬態（模倣）する虫たちは捕食者を前にして、自らが擬態していることを知っていることになる。つまり、捕食者との間で、虫たちは〈我とそれ〉の関係性ではなく、〈我と汝〉の関係性を生きているのだ。コーン風に言えば、「歯の折れたジャガーにならない」ために（狩られないために）、虫たちは生き物たちが複雑に絡まりあう世界で、模倣しているのだ。本発表に対しては、人間の狩るための模倣と異種間の狩られないための模倣は話が逆ではないか、狩られないのではなく狩られるための擬態もあるが、それはどう考えればいいのか、日高のデータと考察は人間側からの驚きに満ちている点で、擬人化の語りを土台としているのではないか、G.ベイトソンの「遊び」の議論などを参照しながら、異種間のわざの考察をより一層深められるのではないか、など様々な疑問や意見が寄せられた。

報告2

「戦場で生まれたアート、トレンチ・アート」田中雅一（京都大学/AA 研共同研究員）

戦争は、アートのテーマにはなっても、創作の場からはもっとも離れた出来事である。それゆえに、アートは平和や反戦、反暴力の活動とみなされ、さらには象徴となるのである。しかし、ここに例外がある。それは一般にトレンチ・アート（trench art）と呼ばれるものである。これは、兵士、捕虜、一般市民が、戦争に関わるものから作る作品である。戦争についてのアートではないし、兵士によるアートだけを意味するわけではない。材料は、不発弾や薬莖、ヘルメットなど、戦争に関係しているものを材料として、これに細工をした加工品（装飾品、時計、マッチ箱カバー、楽器など）である。戦争を題材にした絵画や彫刻を意味するのではない。トレンチ・アートが生まれたのは塹壕（トレンチ）戦が特徴であった第一次世界大戦であるが、特定の戦争に結びつける必要はない。ただし、第一次世界大戦では敵味方がノーマンズランド（無人地帯）をはさんで長いあいだにらみ合うという膠着状態が生じた。そんなときに工兵隊や鍛冶屋出身の兵士たちが、大量のトレンチ・アートを作成し、他の兵士たちも見よう見まねで作り始めた。

本発表では、ベルギー西部の町イーブルでの調査をもとに、かつての戦場（西部戦線）が広大な慰霊空間となり、それによって生じたトレンチ・アートの役割の変化について考察した。例えば、大砲の薬莖に細工をした花瓶は、戦時中は兵士の故郷の家族へのクリスマス・ギフトや帰国の際にはおみやげとなった。戦後になると、トレンチ・アートは墓参りにやってくる遺族たちに「遺品」として販売され、さらに遺族だけでなく観光客目当てに大量生産されて出回った。トレンチ・アートは遺族の家庭に安置されることになる。英国兵士の遺体は、一体の例外を除いてすべて戦地に埋葬されたため、遺族にとってトレンチ・アートは遺品として重要な意味を持っていたのである。そして、それらは戦地を離れ越境することになる。

戦争が始まって1年2ヶ月後の1915年10月に『戦争のアート（L'art a la guerre）』という名の展覧会がパリで開催された。これは『フランスの国（Le Pays de France）』という名の雑誌社の企画で、大成功に終わっている。アルミや銅で作った指輪、ペンダント、花瓶、楽器、パイプ、インク壺、骨でできたミニチュア飛行機などが展示されていた。

トレンチ・アートはまた疲弊した地元の経済的復興にも貢献したであろう。しかし、トレンチ・アートは遺族たちが高齢化することで一時衰退する。また、現在芸術作品として今日評価されているとは言い難い。好事家の収集対象として注目されてきたと考えるのが順当であろう。

報告 3

「ウェンデル・オズワルト『食料獲得の技術誌(1983)』を読む」内堀基光（放送大学／AA 研共同研究員）

ウェンデル・H.オズワルト『食料獲得の技術誌』（1983，法政大学出版局）Wendel H. Oswalt 1976 *An Anthropological Analysis of Food-Getting Technology*, (John Wiley & Sons)。この本は地味な本にしか見えないが、その志は高く、しかもかなり斬新な内容をもった議論を展開している。文化人類学における「物質文化研究」の志を、1970年段階における斯学の現状に照らして語る。物質文化研究がないがしろにされたことについての批判。この批判には同意できる。

物質文化研究における客観性と数値化を目指す。当然ながら、数値化のための諸前提を（再）検討する必要がある。客観性と数値化のために、著者はいくつかの新奇な概念を導入している。これを（再）評価することには意味がある。

目次（邦訳と原語）は以下のとおり、
序論

第一部 技術体系 A Technosystem

第1章 自然物と加工物 Naturefacts and Artifacts

第2章 技術の複合性の測定 Measuring Technological Complexity

第3章 食料獲得用具とその複合性 Subsistants and Their Complexity

第二部 食料獲得用具の分類 The Subsistant Taxonomy

第4章 道具 Instruments

第5章 武器 Weapons

第6章 設備・見張りが必要なもの Facilities: Tended

第7章 設備・見張りが不要なもの Facilities: Untended

第三部 開発の系統 Exploitative Networks

第8章 砂漠と熱帯の生活地 Desert and Tropical Habitats

第9章 温帯から極北圏の生活地及び概観 Temperate to Arctic Habitats and Overview

第四部 結論 Conclusions

第10章 生産の原理 Production Principles

第11章 技術の展望 Technological Perspectives

附章 食料獲得用具とその技術単位 Appendix: Subsistants and Their Technounits

目次から分かるように、導入されている諸概念には以下のものがある。

自然物 naturefact(s)(造語) と加工物 artifact(s)の区別。

技術単位 technounit : 「完成された加工物の形態に関与しているところの、一つの総合された物質的に異なった独自の構造体」 ≡ 部分 (パーツ)。

Subsistant という造語。「食料獲得用具」と訳されている。これは subsist させる agent という意味からオズワルトが造ったものである。本文における具体物の記載部分では form(s)という語がこれと互換的に使われている。訳書ではこれに「形態」の語を充てている。

数値化を図るためには、「技術の測定可能な単位」を考える必要があり、これが「技術単位」という構

想を導いた。subsistant 1つあたりの technounit の数が、個々の用具の複雑さ complexity を表すということになる。用具を構成するパーツの1つ1つが単一の technounit であることが多いが、工業製品のような場合には、1パーツが複数の technounit の集合である場合もある。複合性の測定＝個々の用具はいくつの技術単位から校正されているかを確定する。なにをもって技術単位とみなすか。たしよの幅がありうる。水生食料獲得具のほうが技術単位が多い（他、の諸結果が得られる）。

オズワルトは、Subsistance を大きく、道具 instrument、武器 weapon、設備 facility の3つに分類する。Weapon は離脱部分があることで定義される。Oswalt のアプローチの特徴は、素材については分析からはずす（度外視する）ことである。素材の差異自体は構造分析には重要でないとする。

ある民族社会 (sample) における subsistants (=forms) の数 (inventory の数値) が「総合的技術」の指標となる。Integrated technological configurations と呼ぶものであり、具体的には inventories (of samples) にあたる。これと同時に、個々のサンプル (民族社会) がもつ technounits の総数も問題とする。そこでは、個々の民族社会における上の2数値の比率を2次元平面に落として分布を観る。熱帯よりも寒帯 (極北圏) のほうが複雑な用具を用いる傾向、などの結果が得られる。

具体的には、ウェンデルは地球上の異なる Habitats (砂漠－熱帯 vs. 温帯－極北) における狩猟採集生業と食料生産生業を区別し、それらと総合技術との相関を考えている。これは検証可能な仮説を提供するものとして有益な観点である。

総論として生産原理 (production principles) なる概念を中心に理論的考察が加えられる。それは、subsistance はいかに造られるか、その複合性を増していくかについての理論だが、抽象度が高く、かなり図式的な印象を受ける。そこでは、縮小 reduction→結合 conjunction→反復 replication→連鎖 linkage という生産原理の組合せが考えられている。この組合せは、おそらく削減 → 接合 → 複製 → 連鎖、という訳語にしたほうが分かりやすい。これは基本的には複雑性 complexity の高度化と軌を一にした図式であり、石器を例にとると分かりやすい。

この著作の意義について、少しの付け足しをする。

本研究会のテーマである「わざ」というより「もの」にかかわる考察になるが、naturefact (自然物、自然品) について、人間がそこから働きを受ける自然の、つまり人間の手による加工・変形を受けていない「もの」とみて、より進んだ多段階の区分けを行うことが面白いものとなる可能性もあろう。また、食料獲得について、同一の食料を獲得する複数の技術があるとき、それらは相互排除的な関係になると主張されているが、実際の使用と知識の保持の間には、時間的にも社会的にも一定のずれがあろう。「もの」として実現されていない知識を探る術まで含めて、民族誌学としてはこのあたりのことを追究する必要がある。

おまけの話題も提供しておく。「わざ研」でもともと追究と思っていた課題は、「吹き矢」という題材を端緒としてとり、ボルネオ島の諸民族において「弓矢」の技術あるいは知識の消失している事態の意味を考えようとするものであった。そこから、より原理的に、一般的にある「技術」がなくなる、というテーマについての考察に向かうとした。これについては、『武器の進化と退化の学際的研究——弓矢編』

(石井紫郎他編、日文研叢書 27、国際日本文化研究センター、2002) というのがある。その題名に引かれて参照したのだが、上のテーマには合うとことはほとんどなく、やや役に立ちそうなのは東アジア大陸部の「弩」の起源と変遷に関する部分くらいであった。今のところ吹き矢については、参照すべき研究は少ない。

考えていることは、以下のようなことである。

オズワルト本のアプローチでは素材を問わないとするのだが、吹き矢筒が示すように、素材と用具の形

態のあいだにははっきりとした連関がある。つまり素材によって部品（数）が変わる。吹矢の場合、弓矢とは異なり、矢毒の使用がほぼ不可欠である。これは短小であるという矢の特性による。弓矢より射程は短い、命中度は高い。ことによると熟練の必要性が低いとも言えるかもしれない。ボルネオ島の吹矢筒の場合、鉄のドリルによる制作、バヨネットとしての使用法が特徴である（ユーチューブから採った吹矢筒制作の動画に見える）。これから分かるように、弓矢よりはるかに新しい技術であり、これが弓矢を駆逐したと考えてよい。

1月12日（土）

報告1

「〈見えぬもの〉を表す技術（アート）：3.11後の記録とフィクションの間で」丹羽朋子（人間文化研究機構／AA研共同研究員）

東日本大震災（以下、3.11）は、自然災害とテクノロジー災害の複合災害であり、福島第一原発事故は「顔」の見えない「システムの悪」[デュピュイ 2011]とも論じられる。人々は津波でかけがえのない個別の家財や家族・知人などを喪失し、核災害は多くの避難者を生み、周辺地域に住まう人々は身体的・社会的な存在である自己を縛り続ける「不確定な未来」への不安に苛まれている。3.11から7年経ち、人々は依然として誰一人として「同じ」ではない自己の被災後の経験を、「被災者」「フクシマ」と一括りにされたり、「確率論的な存在」[斎藤 2012]として一般化・匿名化されることに違和を訴える一方で、それ以上に被災地外の人々にとってこの大震災といまだ収束の見えない核災害が「過去の記憶」と化し、忘却されゆくことを懸念する。

そのような状況のなかで、〈出来事〉の分有はいかにして可能となるのか、「被災者」の経験した出来事や記憶はいかにして、経験者自身の固有の出来事そのものであると同時に、同時代あるいは未来を生きる「他者」の私事となり得るのか、という問題は、我々が思考すべき重要な課題なのではないか。

このような問題関心から、発表者はこれまで、特に3.11当時に高校・大学等に通いながら、被災経験をめぐる記録と表現実践に取り組んできた若い作り手たちと交流し、映像作品の上映の場などを作る活動を行ってきた。その過程で注目したのは、あの経験を他者に伝えうるための表現を作り出すという切実な課題に向き合うなかで、比較的早い段階から、「現実」の記録と「フィクション」の混成、あるいは「現実」を割り込ませた「フィクション」化が模索されてきたということであった。

「より遠くまで深く届くように手渡す」べく試みられてきた映像・演劇・現代美術等の「芸術」的表現実践の中から、本発表ではとりわけ、記録映像には映りにくい〈見えぬもの〉を表す技術（アート）に焦点を当て、考察を試みた。具体的には、いくつかの記録映像作品と、演劇作品を対象に、死者、人および人以外のもの（動植物など）との間の関係性や差異、放射能、「複数化」する時制等について、具体的にどのような表現手法がとられてきたのかを、作り手や鑑賞者のコメント等に触れつつ、分析した。

加えて、「展覧会」等の芸術実践を公開・共有する装置がもつ、空間的・時間的に遠い場所にいる人々と「被災地」との壁を顕在化し、揺さぶりをかけて「他者」を巻き込んでいく技術についても、近年のアーティストや美術展の事例を取り上げた。

以上のような具体的な実践の比較考察を通じて浮かび上がったのは、「当事者と非当事者の二項対立的枠組の乗り越え」「死者や喪失した街の風景の新たな〈生〉への注視」「震災〈当時〉とそこから隔たった〈現在〉の切り分けの再考」といった幾つかの性向であった。発表の中ではこれを、「3.11＝出来事との距離を顕在化し、複数形の「私」への批判をまじえつつ、巻き込んでいく技術」として論じ、議論

を行った。

報告 2

『わざ』の越境におけるモノ—日本におけるバリ・ガムラン演奏と楽器」吉田ゆか子 (AA 研)

わざ、身体技法はそこで用いられる道具 (モノ) と一体化し、その相互的な影響の中で育まれる。よってそれらの「道具」は使い手の身体動作に適合的に作られているだけでなく、わざが埋め込まれた社会的文脈にも影響され形づくられているはずである。本研究は、このわざとモノの関係について、楽器演奏と楽器の関係を事例に、特にわざの越境の場面に注目することで明らかにするものである。具体的には、インドネシア・バリ島から日本へもたらされたガムラン音楽の演奏技術 (わざ)、そしてそれを担う日本人演奏者たちの活動を取り上げ、その中で、楽器がどのように作用するのかを考察した。音楽教育の一環として、日本の大学にもたらされたガムラン音楽であるが、それは次第に学外で市民たちによる活動へとひろがりを見せるようになる。バリで、楽器は神格(あるいはその力)を宿す存在でもある。また、フルセットのガムラン楽器は、通常 20 名以上で演奏されるもので、青銅製の鍵盤楽器を中心とした構成になっている。それぞれかなりの重量があり、場所もとる。本研究では、大学ではなく、その外で形成された、都内の 3 つのガムラン演奏グループの事例を分析した。そして、本発表ではバリから運ばれたガムランの楽器が、こういった神格との繋がりや物質的特徴や、(バリからもたらされたという) 履歴の面で、日本人の演奏家たちの上演や舞台裏の営みに、ユニークな作用をすることを指摘した。なお、バリでは、村や集落などで所有されることも多く、沢山の人手やサポートがあるなかで、移動やメンテナンスが行われる。一方、日本ではそれらの人手や、活動を支えるコミュニティには恵まれず、より趣味的な活動と位置付けられることが多い。そして演奏者は日本の狭小な住宅環境の中で、楽器の大きな音、移動のしにくさ、物理的な大きさに翻弄される。こうした日本人演奏家たちの奮闘する姿は、逆にバリ島における音楽とコミュニティのつながりや、音を取り巻く物理的・社会的環境における日本とバリの違いを照らし出すものであるという点も本発表で指摘した。

報告 3

「ブルーノ・ラトゥール再考: ANT・存在様態論からモノ研究へ」久保明教 (一橋大学/AA 研共同研究員)

本発表では、近年の人類学的モノ研究に影響を与えてきたアクターネットワーク論 (ANT)、とりわけブルーノ・ラトゥールの議論を彼の著作 “Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory” および “An Inquiry into Modes of Existence an anthropology of the moderns” を中心に再検討し、その議論を踏まえた人類学的モノ研究のあり方を、1960~2010 年代の家庭料理の軌跡をめぐる筆者自身の事例分析と接続することによって、その実効性・可能性・問題点を検討した。

アクターネットワーク論は、とりわけ「人間以外の存在もアクターとみなす」という特徴において注目されてきたが、この特徴は、「自然法則に従う事物のふるまい/意志をもつ人間の行為」ないし「科学的に説明される物質/社会・文化的に説明される象徴」の分割および非対称的把握という ANT が否定する発想を前提にして把握されることによって、しばしば、「自然法則に従う事物のふるまい」も「意志をもつ人間の行為」のように把握できる/すべき、あるいは、あるモノについて、社会/文化的説明だけでなく科学的説明も併記すべきとする主張として把握されてきた。だが、そうした理解に対するラト

ラトウール自身の批判を鑑みれば、ANT は、常識に反した何かしらの「人間と非人間の対称性」を打ち立てるものではないこと、また、象徴論的／自然主義的説明を併記すれば ANT になるわけではなく、むしろ諸アクターが「主体／客体」、「科学的な物質／社会的・文化的な象徴」に分岐する以前にそれらの関係性を追跡し、その組立を「デザイン」することを目指す方法論であると言えることを指摘した。

その上で、ラトウールの議論において、モノをアクターとして捉えることの効用は、諸アクター間に特定の非対称性を生み出す特定の関係性の効果として捉えられた「権力」、あるいは諸関係における非対称性の発生を説明できることに置かれており、この「権力」概念が「特定の個人／集団が自らの意図に基づいて他者を強制させる力」ではなく、「ひとつの点から他の点へのあるところならどこにでも発生」するものであり、「私たちは皆、自分たちの身体の中に権力をもっているのだ」とも言えるという点で、ミシェル・フーコーの権力論に極めて親和的であると同時に、「私たち」のなかに人間以外の存在者を（フーコーよりも明示的に）カウントし、「身体」を「関係性」に置き換える（あるいは拡張する）点に違いがあることを指摘した。つまり、「人間以外の存在者＝アクター」の導入は、「私たち＝諸アクターが自他の取りもつ関係性を通じて生みだしている権力＝非対称性を説明する」という効用を持つのであり、ラトウールの議論を踏まえたモノ研究を「種々の存在者が「客体／主体」ないし「物質／象徴」に分岐する以前の局面において、それらが新たに結びついていく関係性を追跡することで、そこで生みだされている非対称性を説明しデザインし直す試み」として捉えうることを示した。

こうした方法論を、家庭料理の軌跡をめぐる筆者自身の事例分析と接続するなかで、その有効性として、家庭料理をめぐる様々な実践の背景にあるものとして通常は取りだされる種々のイデオロギーが、具体的な人やモノや概念のネットワークにおいて矛盾や齟齬を含みながら分散的に生成されてきたこと、関係性を辿ることによって固定された社会的構造や人々の実践を規定する固定的なイデオロギーを想定することなく、矛盾や齟齬をはらんだ関係性の動態を説明できることを示したうえで、その問題点として、2000 年代以降の家庭料理をめぐる実践において浮上してきたような生活を絶えずデザインし直すべきものとして捉えるような発想を、ラトウール自身の議論が「自然も社会も所与の基盤を持たず絶えず私たちがデザインしていくものだ」という仕方で学問的に正当化する道具になりうることを指摘し、しかしながら、そうした発想を伴う実践が生み出す諸関係の非対称性を分析しデザインし直す道具ともなるところに可能性を見いだしうることを明らかにした。

（以上、終わり）